

第 39 回東北建築賞（研究奨励賞） 選考報告

選考委員長 飛ヶ谷 潤一郎

本年度（2018 年度）の研究奨励賞への応募論文は、歴史・意匠分野において齋藤駿介氏（京都大学）から提出された「仙台における建物疎開跡地の処理―戦時期仙台における防空都市計画に関する研究（その2）―」の1編と、構造分野において高館祐貴氏（東北大学）から提出された「一様流中における大スパン構造物の屋根面に作用する風圧の特性」の1編であった。

齋藤氏の論文では、第二次大戦で被災した仙台の戦前と戦後との関係を断絶ではなく、連続ととらえ、建物疎開に着目することによって、その経緯、計画・実施状況が詳細に説明されている。本論文で扱われている内容が戦災復興期でありながら、副題が戦時期である点などに若干の不整合が見られるものの、その成果は戦前と戦後との関係にとどまらず、現在にまでつながる視座を提示したものとして高く評価できる。また修士課程在学中から、本論文以外にも関連するテーマの論文を精力的に投稿しており、今後も仙台の近現代都市史研究を深めていこうとする強い意欲がうかがえる。

高館氏の論文は、大空間構造物に作用する風荷重の特性について数値流体解析を用いることによって、従来の空力弾性模型を用いた風洞実験や強制振動実験におけるさまざまな制約を超えた解析を可能にした力作である。本論文では、陸屋根、円弧屋根、そして吊屋根を有する大空間構造が対象とされ、逆対称一次モードで強制加振された屋根に作用する非定常空気力の特性が明らかにされている。解析のみによる結果が、実際の大型構造物にどこまで適用できるかについて、専門外の審査委員から疑問が投げかけられたものの、非常に高度な水準の研究であることに疑いの余地はなく、モデルの設定や解析は高館氏本人が主体的に行っていることも勘案すれば、今後もさらに質の高い研究へと発展させていくことが十分に期待できる。

以上より齋藤氏の研究について、出席委員の評価と他委員による事前報告書の内容とを併せて集計した結果は、合格 11 名、不合格 1 名、棄権 1 名であった。不合格意見として、前述の内容と副題との不一致に由来する論述の未熟さや、導き出された結論の魅力の乏しさが挙げられ

たとはいえ、最終的には出席委員の合議（及び委任状）の結果、東北建築賞の審査基準にある「今後の発展が期待できる論文」として合格と判断し、研究奨励賞に相応しい業績であることで合意が得られた。一方、高舘氏の研究については、審査委員は全員一致で合格と判定し、研究奨励賞に相応しい業績であることを承認した。

第 39 回東北建築賞（研究奨励賞）選考委員会

委員長：飛ヶ谷潤一郎

委員：石井 敏、石山 智、苅谷智大、木村祥裕、相模誓雄、櫻井一弥、佐藤 健、
菅原正則、鈴木道哉、寺本尚史、西脇智哉、速水清孝